

聖霊降臨の主日 (ヨハネ20:19-23)

一同が一つになって集まっていると



聖霊降臨の主日を迎えました。第一朗読の出来事を鍵にして今週の学びを得たいと思います。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が点から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」(使徒2・1-11)中田神父が目を留めたのは、「一同が一つになって集まっている」という部分です。「一つになって集まっている」とは、どういう状況でしょうか。「一つになって」が付け加えられています。

この聖堂に今、何人集まっているでしょうか。50人でしょうか、100人でしょうか。「一同が集まっている」これは当てはまっています。さらに踏み込んで、「一同が一つになって集まっている」と言えるでしょうか。先週は主の昇天でした。もし、「ミサのあと、信徒総会があるから」と思ってミサに参加していたなら、それは「一同が一つになって集まっている」状態でしょう。実際にはどうだったでしょうか。

今週、聖霊降臨の主日のミサに「一同が一つになって集まっている」この状態はどのように言い換えることができるでしょうか。中田神父の考えでは、「聖霊来てください」と皆が祈るために集まっている。そうであれば、「一同が一つになって集まっている」ということを意味していると思います。半分くらいの人が「聖霊来てください」と祈っているとしても、それは「一同が一つになって集まっている」とは言いにくいでしょう。

ましてや、「何も祈っていない、早くミサが終わってほしい」と考えている人がほとんどなら、「一同が一つになって集まっている」状態からは完全に外れていると思います。これは今週のミサに限りませんね。おそらく、「一同が一つになって集まっている」姿は、弟子たちが、祈りながら、集まっている状態を指しているのでしょう。ただその場にたむろしている状態では決してないわけです。

私たちは今週の聖霊降臨の主日までに、「聖霊来てください」と祈りながら、過ごしてきたのでしょうか。具体的に「聖霊来てください」という言葉でなくても、教会家族として、祈りのうちに聖霊降臨の主日を迎えたと言えるでしょうか。

良い報告ではありませんが、五月の聖母月、週のうち月・水・土の三日間、教会でのロザリオの時間を設定して過ごしてきました、私も信心深い人間ではありませんが、ある月曜日にロザリオに参加してみたら、小学生が一人だけ参加していました。「一人なの?」と助任に聞いたら、「土曜日もこの子が一人参加でした」とのことでした。

私は思ったのです。「本当に私たち教会家族は、祈りながら聖母月を過ごしてきたと言えるのだろうか。『一同が一つになって集まっている』という状態から、程遠いのではないだろうか」そういう懸念を持ったのです。

雨は、どうやって降るのでしょうか。「水蒸気が地表から集まって雲ができて、もうこれ以上雲の形でとどまれなくなったところで雨が降る」そういうものではないのでしょうか。聖霊降臨を、雨の降りかたに例えたなら、見当違いでしょうか。

つまり、教会家族の祈りが地表から集まって、これ以上雲の形でとどまれなくなったところで聖霊がくだってくる。こんなふうにイメージすることは、理解の助けにならないでしょうか。弟子たちも「一同が一つになって集まっていると」炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」(2・3)のです。教会家族に聖霊が降る、私たちはそれを十分期待できる過ごし方をしてきたでしょうか。

与えられた福音朗読の中でイエスは「聖霊を受けなさい」(ヨハネ 20・22)と言っておられます。聖霊は必ず御子を通して御父から送られます。しかしその聖霊がとどまる場所が必要です。聖霊は「聖霊の神殿」である私たちにとどまって互いに赦し合い、愛し合う賜物を授けてくださいます。すでにヨハネの共同体の中でも、赦し難い人がいたのでしょう。

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。」(同 23)一人ひとりが、聖霊がとどまる神殿として自らを調べ、聖霊が妨げなく働くようにしておけば、教会の存在意義は現代にあっても輝きを放つでしょう。

聖霊は必ずやってきます。あとは聖霊がとどまる場所、とどまる人が現代にあっても必要です。先週の繰り返しですが、「ほんの少しお手伝いする人」に、聖霊はとどまって働くのでしょうか。それとも「腕まくりをして教会にお手伝いする人」に、聖霊はとどまるのでしょうか。

聖霊が現代にあっても働くことを信じて祝い、聖霊の働きを示し続ける教会家族であるように、このミサの中で続けて祈ってまいりましょう。

三位一体の主日(ヨハネ3:16-18)